

## 2016年 上廣・カーネギー・オックスフォードレクチャー 報告

去る10月26日、マイケル・イグナティエフ教授（セントラル・ヨーロッパ大学学長）による講演が、「人権、グローバルな倫理、日常の徳（Human Rights, Global Ethics and Ordinary Virtues）」との題目で、オックスフォード大学マートンカレッジにて行われました。イグナティエフ教授は、当財団が後援するカーネギーカウンシル百周年記念事業の座長として過去4年に渡り世界中で倫理的諸問題に関する対話を続けてきました。この度の講演はその集大成を報告するもので、満員の大会場の聴衆が見守る中、オックスフォード大学ルイズ・リチャードソン大学総長、オックスフォード上廣センター所長ジュリアン・サヴレスキュ教授、カーネギーカウンシル理事長ジョエル・ローゼンタール教授も出席のもと、上廣・カーネギー・オックスフォードレクチャーとして開催されました。

イグナティエフ教授の考察の対象は、一見すると人種差別的、排外主義的、教条主義的と思われる人々の行動原理と、そういった人々に対する適切な語りかけ方についてでした。例えば、移民賛成派は反対派に対し「差別主義者」といったレッテルを貼りがちですが、多くの場合、反対派は自分たちの近親者やコミュニティの守ろうという「日常の徳」に動かされた善意ある市民であり、彼らの倫理観を無視し、人権侵害といった「権利の言語」を用いて一方的に断罪することは、規範的に疑わしいばかりでなく、逆効果になる場合が多いとイグナティエフ教授は述べます。ここで教授は、それぞれの国や地域の慣習を一切理解せず、国際規約に書かれた文言を根拠として「権利の言語」を語り続けてきた法律家やNGOなどを批判します。しかし他方で、「慣習」の名の下に重大な人権侵害が横行することは許されないと述べ、極端な文化相対主義も批判していきます。その上で、ある社会を外部者が批判する場合、第一に、外部者はその社会で暮らす人々の声を聞き、慣習を理解する道徳的責務があると主張します。そして、ある程度の時間を費やし理解を深めた後、外部者は初めて発言権を得、倫理的な事柄につ

いて議論ができるようになると、イグナティエフ教授は述べます。さらに、こうしてある程度の共通の土台を築いた上で議論を進める際、外部者はできる限り「権利の言語」を避け、「贈与（ギフト）の言語」を用いるのが賢明だと教授は主張します。というのは、「権利の言語」は未だに先進国の一部の層にしか受け入れられておらず、倫理的問題を考える際、圧倒的多数の人々は「困っている人が気の毒だから・・・」、「親切にしてあげようと思って・・・」といった「贈与の言語」を用いるからです。こうした言葉に注意を向け、「日常の徳」の言葉を通じて人権の要求を叶えていくことは、より現実的であるというだけでなく、世界人権宣言の精神に則るものだとイグナティエフ教授は述べ、講演の冒頭と最後を、「宣言」の起草と採択に尽力したエレノア・ローズヴェルトの言葉を引いて締めました。

現代人権研究の世界的権威であり、ハーヴァード大学ケネディ行政学院の人権研究所所長も務めたイグナティエフ教授が、「権利の言語」に対しかなり批判的なことを述べことに、驚きを覚えた聴講者もいたようです。教授自身も、世界中で倫理的問題についての対話を重ねた結果、人権論者としての自らの確信が揺らぐ経験があったと認め、カーネギーカウンシルの事業への参加は「私自身を変えた」と語りました。しかし、移民問題に揺れ、ナショナリズムが再燃し、自らの生活ためであれば難民がいくら犠牲になっても構わないという狭隘なエゴイズムが広まるヨーロッパで、人権の理想主義と政治的現実主義のバランスを模索するイグナティエフ教授の姿に、西洋世界の良心を見た聴講者も多かったのではないのでしょうか。

オックスフォード上廣センター

蛭田 圭